

まなびどまろの熊本に、

立ちし々ふこそうれしけれ」

祝へや競へ筑紫人、

めぐみを報ひ身を立つる

まなびどころの熊本に、

立ちし々ふこそうれしけれ」

明治廿五年の秋熊本なる高等學校の數

百の人々と薩隅日の三州へ行軍の歌

園 哲 雄 稿

「いかにやいかに荊萱の

關の戸さゝぬ御代」といひ

又或人は、大君の

爲には何か惜しからん

薩摩の瀬戸に身は沈む

ども」といひしは鳥がなく

東路よりし打日さす

都よりしてわが心

つくしのはてに居え君を

慕ひつゝこし村肝の

心をやりし歌ぞかし

そのかみ幕府あることを

えりて天朝あることを

えらぬ僻事概みて

維新の基たてなんど

たてし操よおのがその

身を屠らかし身を沈め

明治の御代の御光に

顯しゝ名をいざ行き、

吊ひ見てんいざ給へ

頃は明治の二十年

たつ田の山の松が枝を

銃^ツどりかつき百貫に

もしなめげなるとあらば

すめら軍の魁の

宇土^{ウツ}天草の山々れ

瀬戸うちすぎて見渡せば

雲か山かは時にどり

春ならねぞもちうち靡く

玄のぶも遠き古の

見そなはしけん不知火は

のみならずして幾千年

思へばわくる濤れ色

御船到りし豊の村

船漕ぎよせてわくらばに

名にしおひぬる白嶋は

五とせ過ぎし秋風の

さと吹く聲に大丈夫が

臆して四方の國

日の大旗をおしたてゝ

學ぞいと勇しき

送迎^{オクヨムカヘ}をみ角^{スミ}なる

絃たゝき諸聲の

いみじくきこゆ梓弓

柳の瀬戸をすぎ見れば

帝とこゝにいでまして

たゞ國の名にのこり^ぬある

變らずこゝにもえ出づと

たゞならずこそおもほゆを

寒泉^{シムヅ}めしつる水島は

見べきよすがはなけれど

花なす浪のその上の

銀山シロカキと見るべかり

野坂の浦の三太郎

こををや肥後の南なる

進む船路と隼人の

矢筈が岳と高山の

やはづがたけの南には

すむむとぞ歌ひひさつま人

辛くも越えしかる萱の

今日見る袖も露々きは

神のまします鹿兒嶋へ

ひき直さまくおもほえて

米の津すぎて黒の瀬戸

岩にせかるゝ瀧あして

灘と此處こゝとを舟人の

さもあらばあれいでやわが

遠き荒濤ふみ渡り

赤松佐敷津奈木とて

雲を凌げる勢は

國の界となしつらん

薩摩に入れば出水なる

大人ウシかうのかみみさつまがた

鬼を欺くますら男ぞ

いかにやいかにとも歌ひ

關路の趾をはるくと

ゆいしき功照國イサキの

入りてろの世の曲事マカを

泣きて口説クダきし名残なと

長島あたり瀬を早み

遠江灘トウザウ立界タチカイの

三つと敷ふる處なり

筑紫男兒ツクシノオトコは外國トウシヨの

皇國ミコクの御稜威ミイヅ廣ヒロむると

かならずすべきわざなれば

こしきの島や久見の崎

川の流れし處とぞ

東は加世田野間が岳

海の南は煙立つ

げに面白く行く舟の

枕崎てふ處あり

北と田布施の金峯山キンブゼン

海門岳はうるどしく

東へ行けば大隅の

臺もころあれその右に

急ぐ舟路はやま川を

又谷山の七つしま

小根占又は新城と

沖の小島と鳥嶋

又雁島と櫻島

物の數かはおぼろげに

出でしこなたは仙臺の

阿久根の海は西廣く

坊の津めぐり舟浦の

硫黄が島もほの見えて

北の陸路は敷栲シキタクの

こは古の大漆

かぶの金山なりにきと

さつま小富士の名ぞ高き

さたのみさきに燈明の

種子が島山眉なせり

左に見つゝちりん島

右に見ゆるは大根占シメ

垂水の外城神瀬嶋

そこはかどなく見過して

麓に見ゆる笹原の

中に隠せる砲臺は

外國人の寇し來て

生麥のこと憤り

破りもをへず一艦は

かきにかゝりて一息を

放つ一矢に射とむれば

照國神の御まわざは

丸を縛へて水中に

漁網にかゝること

わが國人の討死は

三十とせ過ぎしけふすらも

怒放ちま筒音の

鶴丸山はかご島の

いと光の照國の

縣社は稻荷諏訪祇園

祇園の社うちすぎて

昔文久元年に

七つの軍艦を毛て

繰り撃ちなし、祇園の洲

うちすくめられ退きて

つきし艦長狙ひつめ

碇をすて、遁げうせき

かくぞかしこき物なりし

葬りたりし敵人と

十まり三つ又及びしが

僅に四人ありしとぞ

濤の音高くうちき響

あるかなきうにさも似たり

城山をいひいく千代も

社はあでにきうくし

若宮春日の五つあま

田の浦にある薩摩焼

磯にいみじき糸つむぎ

龍が水なる大崎が

心の月のさつま瀉

國を憂ふる恨をば

鳴立つ澤にあらねども

「幽明隔て墓の前

なき人数に入りぬれば

やよな迷ひぞ大御代と

習ひ修めて天が下

なさんはこゝにうち集ツトひ

大人ツシの心をうけつぎて

修アサヒむる學ツツとれる銃

爲には何か惜しからん

白濱傳ふ重富は

帖佐の米山薬師には

勝を祈アサヒめて「命ツツめらば

み船の社すぎゆけば

鼻の淀みは「曇りあき

沖の波間」と月照の

呑みて入りにし趾なれば

物のあはればえられけり

哭ミダマきしその人今とはや

靈魂ミダマやいかに迷ふらん

日々に開アサヒくる學業

まつろはぬ國なかるべく

どふ人々の心なり

このことをしも遂げざらば

何の爲かは「大君の

心ぞ千代の鑑カシなる

百二の外城の一つなり

ある人々の戦の

又もきて見ん米山の

薬師の堂と壁板に

蛇の尾岳はむくつけき

あやしき岩のふくましく

をこがましくも立ちぬるは

これも外城の一つなり

山とを謠ふますら男の

溝部の外城うちすぎで

銃を肩敷きまどろめば

夢路とるけき故郷の

銃とり直しあかふひく

君が軍に勝ち栗野

謠ひ續ぐめる外城なり

越えて日向に入りぬれば

一夜を明し古の

吊ひ行けば啼く虫の

あれより肥後の大畑を

やをら書きにし趾どかや

名さへもおどろくしく

天を貫く勢の

これ大隅の加治木にて

「天のじやを山天のじやを

心の内やいかならん

同じ外城の横川に

枕に近き雁の聲

誰が音信とさうまはし

朝立ちゆけば義弘の

里とて今もうなわ子が

又も外城の吉松を

これも外城の吉田にぞ

戰場なる加久藤を

聲さへつらきこゝちせの

すぎて入吉城なせば

球麻の大河壩となり

昔熊襲の叛きしも

かゝるけはしき處ころ

渡部にしもわらねども

河面遠く見渡せば

逆巻く浪の雨霰

もとより逆櫓の争は

大石避くるすべなれば

伊勢の義盛めかしつゝ

あへなく出す 舸ヘヤフネは

岸と石との中を縫ひ

行くありさまは唐人の

みどりの雲の間より

還る」といひて又後に

啼けども駐らなくにして

萬カヤナつ重る山カヤナ」をみそ

その固めころこよなけれ

大隅の國ウツノ噲吹かけて

たのむ根城となまつらめ

臆えて待ち居たる

かならず暴風シラキは吹かなくに

すさましてふも愚なり

あらず鼻櫓をかけし舟

やがて舟子へ銃ツツを向け

早く漕げよと促せば

弦をはなれ玄矢の如く

渦と浪とのきはくわいり

「あしゝに辭シせる白帝の

千さとの江をか一つ日に

「兩つの岸の猿聲は

軽かる舟はすでに過ぐ

いひしもこゝに似たりけめ

大瀬の岩戸うちまぎて

槍倒してふ名もをかし

淀みとあらで東のまに

父の帝に立ち別を

命の宮は官オホヤクの

咽ぶ泉の聲遠く

恨を惹ける麓村

龍が峯より峯つゞき

「肥後のひ川のひうち石

多かる川をうち渡り

過ぎてぞ右は五色山

宇土は小西が古き城

雁回といひ爲朝の

大杉立てる處なり

橋うち渡り劣れりと

飽田の原の八千艸の

岸の下浪のり下る

瀧とやいはん瀬といはん

八代城にたどりつく

獨來ませま懐良の

御祭の世ぞたのもしき

さゆる梢は風長く

るの陵といひ傳ふ

肥後の小富士を望みつゝ

ひまなくひろふひとぐぐ」の

又砂川も松橋も

土のいろく美しき

木原の山の又の名は

籠りし城は山の北

畫圖と緑の川尻の

思ひ捨つべき品もなき

花岡のぐり歸りくる

人をぞ松の立田山

常磐の綠色深き

第二回開校紀念式祝詞

本科第二級總代 甲斐 一之

往年開校式ノ盛典ヲ舉行セラレシヨリ正ニ二周年乃テ茲ニ第二回開校紀念式ヲ催サル嗚呼歲月眞ニ梭ニ似タリ二年ノ日子一轉瞬ノミ然レモ滿帆ノ順風ハ此短日月ノ間ニ我校ヲ驅テ遂ニ隆盛ノ丕運ニ向ハシメタリ嗚呼何等ノ快ク燦爛タル北斗長ヘニ天ノ一方ニ懸リシヨリ、北ヨリ南ヨリ西ヨリ東ヨリ衆星向ヒ集マリ遂ニ大厦ヲシテ小ナラシメ廣園ヲシテ狹カラシム嗚呼何等ノ快ク竹刀相交テ聲龍山ヲ撼カシ弦聲空ヲ破テ響九天ニ徹ス是ニ於テカ体驅漸ク壯ニ意氣漸ク豪ナリ嗚呼何等ノ快ク深遠ノ理玄々ノ教裝幀既ニ成リ潮水既ニ滿チ今ヤ確然トシテ徐ロニ學海ノ願路ヲ航ス嗚呼何等ノ快ク倫理ノ道日ニ精ク網常ノ教月ニ明ニ忠勇ノ精神ハ愈ク陶冶涵養セラレ義烈ノ氣慨ハ益ク鼓舞奮興セラレ遂ニ至誠ノ熱血滿腔ニ迸シラントス嗚呼何等ノ快ク月累リ年進ミ遂ニ我校ノ威風ハ名利ノ妖雲ヲ吹キ拂ヒ權謀ノ瘴霧ヲ消シ盡シ月ヲシテ益ク白カラシメ水ヲシテ愈ク清カラシメ芙蓉ヲシテ益ク高カラシメ琵琶湖ヲシテ愈ク深カラシムル豈ニ難シトセンヤ嗚呼何等ノ快絶ク焉ク知ラン千載ノ下、校内ノ庭柯ハ遂ニ盛ニ蔽芾タル甘棠ヲ歌ハシムルナキヤ嗚呼何等ノ快絶ク、而シテ此等幾多快絶ノ基因タル、本校開校式ヲ紀念スルノ今日、嗚呼誰